

# ひろば

Vol.118 2011.03.23. 発行  
東京工芸大学同窓会

<http://www.t-kougei.gr.jp>  
発行人：田沼 武能  
〒164-8678  
東京都中野区本町 2-9-5  
TEL & FAX 03-5371-2710 (事務局)

## 2011 卒業制作展にあたり

卒業制作展委員会委員長

田邊 順子

芸術学部の卒業制作展は、600名近くの学生たちの作品がそろって展示される大規模な展覧会です。桜の舞う中、はじめて大学の門をくぐってから、新たな知識や技術に触れる新鮮な驚きとともに、自分の可能性を信じて積み上げて来た四年間の集大成として、ひとつの結果を示す大切な機会となります。各学科の会場にズラリと並んだ作品からは、その一つ一つに注ぎ込まれた学生たちの熱意と努力が伝わって来るようで、毎年深い感慨を持って開催の初日をむかえます。

卒業制作展というのは、学生時代の終わりを告げるものであり、同時に、人生の次のステップへの始まりでもあります。一つの目標に向かって、全力で取り組んだ経験は大きな誇りとなって、これからの彼らの長い人生を支えてくれるものと私は思っています。

今年も、開催日程の3日間とも会場の中は大勢の来場者の方々に、熱気に溢れていました。それは来場いただいた6,000人もの方々からの、すべての作品におくられるエールのようにも思えます。

精一杯の力で何かを成し遂げ、世の中に発表する。この芸術系大学特有の「卒業」のかたちが、今後も続いていくことを心から願っています。



# 写真学科

Department of Photography



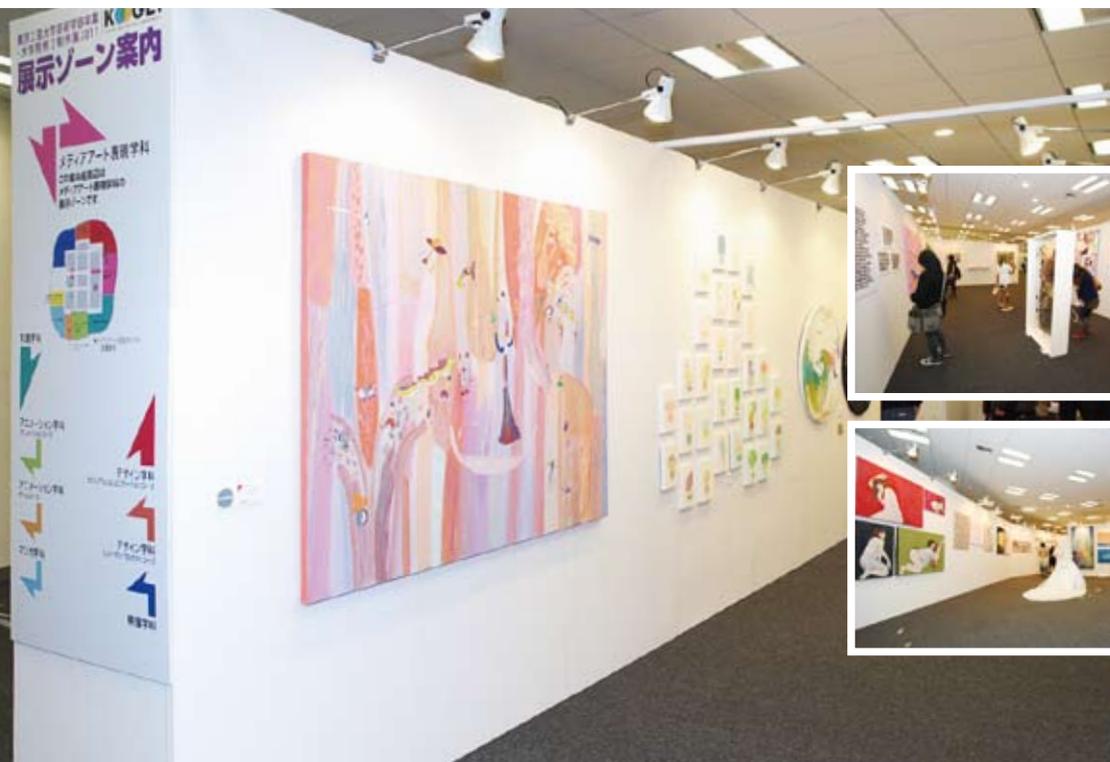
# 映像学科

Department of Imaging Art



# デザイン学科VC

Department of Design Visual Communication course



# デザイン学科HP

Department of Design Human Product course



# メディアアート表現学科

Department of Media Art



# アニメーション学科

Department of Animation アニメコース



# アニメーション学科

Department of Animation ゲームコース



# マンガ学科

Department of Manga

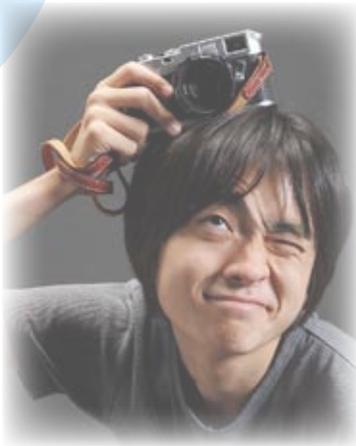


写真：広報 福村 敏 (45期)、糸賀成水 (56期)  
Vol.118 東京工芸大学同窓会 9

# 卒業にあたって.....

## ■写真学科■ 山下 龍之介

高校で始めた写真をもっと知りたくて、入学した工芸大でしたが、早いものでもう4年も経つのです。この気持ちをフィルム現像で表現するならば、そう、現像液注入直後の気泡抜きくらいの短さです。



「カメラがなくては写真は撮れない！カメラといったらライカでしょ」と免許取得のために蓄えた貯金を切り崩し、ライカM4を手に入れ、うっとりしたあの日。

「報道写真部ってかっこいいな」と思い込み、決してきれいとはいえない暗室で仲間たちとおしゃべりしながらプリントしたあの日々。

4×5カメラの撮影実習で「本城直季の真似をしてやる！」と意気込みアオリを試みるも見事に失敗し、フォトラマを無駄にしたあの日。

石膏像のプリントが思うようにならず、印画紙一箱を使い切ったあの日。

「江の島撮影実習は一緒に回ろうね」と約束していたのに、僕が勝手に友達と回ったために一人になってしまい、スネた彼女に必死に謝ったあの日。

内藤明先生の講義を聴き、アラン・ケイとトーマス・ノールを尊敬するようになったあの日。もちろん内藤先生も僕の尊敬する先生です。

「セグウェイが乗りたい」という一心で、心身ともにポロポロになりながらも仲間たちと成功させた学園祭。

庶務課の池田さんの立派なお腹をなでなでしたあの日。

「ライカで撮ったらフォコマート（引き伸ばし機）でプリントしろ」思い立ったが吉日、ebayでフォコマートに購入。

「フレックスタイト（フィルムスキャナー）は一家に一台はあたりまえでしょ」思い立ったが吉日、しかし高すぎて買えず。

10時から始まるゼミは実家暮らし（大和在住）には辛い。前日から泊まり込んでいたあの日。

「今日も研究室で寝袋っすか!？」優しく声を掛けてくれた守衛さん。

毎日のように提出していた時間外届けを嫌な顔ひとつせず受け取ってくれた学務課の方々。

かつての概念にとらわれない内藤明先生が大好きで配属された6研（デジタル表現研究室）。

こんなに素晴らしい思い出が作れた東京工芸大学に感謝の気持ちでいっぱいな今日この日。

さて、僕は社会に出て現像されてきます。人生これからです。

## ■映像学科◆ 近常 奈央

大学生5年目です。今はそう笑って言えるけれど、当時の私は同期の仲間達と卒業式を迎えられないことに何度泣いたろうか。



それが今では悲しみや寂しさとは全く違う感情が胸に溢れているように感じている。

この長い学生生活の中でたくさんのお会いがあり、それらが私をどれだけ豊かにしてくれただろうか。とりわけ人との出会いというものには私はいつも惹かれているのだと思う。

例えば、フランスでの1年間の生活。教室では世界中から来た生徒たちと同じ机を囲み、同じ言語で会話をする。変な話、初めて私は地球の住人の一人なのだと感じた。言語はもちろん宗教や文化が違うことは当たり前で、人種や肌の色の違いではその人を判断するなんてことはできない。地球の向こう側の人と同じ空間で会話をすれば、もうどこの誰かはさほど重要なものではなくなる。

違いが良さに、自分が自分らしくいれた時、私達は友達になれるのだから。実のことを言えば、日本での私はそういった“友達”の感覚には疎かったと思う。こうして時間をかけてその感覚を得ることができたことを嬉しく思う。

だからどのタイミングで卒業するかなんてことは関係なく、自分らしく前に進んで行くだけでいい今は思える。ここまで来て、さすがに卒業して行けることを、両親と先生方、友人に感謝したい。

これからもっと広い世界と、もの作りに関わって行けるよう、歩んで行きたいと思う。出会った全ての方へ、ありがとうございました。

## ■デザイン学科VC■ 遠藤 ゆりこ

幼い頃から絵を描くことが好きでしたが、入学した当初はデザインに興味がありました。

大学では授業科目をほとんど自分で選択し、何をそこで吸収するのかも、もちろん全て自分にかかっています。



1、2年次は特にデザインや絵画などさまざまな表現を基礎から学べる授業がたくさんあり、私もいろいろな表現方法を吸収したくて、デザインだけに偏らず気になった授業は受けてみるようにしました。

そこで重要なのは、どの授業もいいかげんにせず、その授業の中で発表する作品はそこで出せる自分の考えをしっかりと表現しよう、ということでした。

自分の興味のない分野だからこの授業は取らなくていいとか、せっかく取っても合わなかったからいいかげんにするというのではなく、どれもひとつの形となるよう興味となるものを発見し、自分で考えてもわからず気になることは、積極的にその授業の先生へ質問するようにしました。

そうしていく中で、絵具を使い自分の手でひとつの世界をつくりあげていく表現に触れ、自分は絵を描くことを更に深く追求したい、たくさん形を残していきたい、一番やりたい方向なのだと思ってきました。

今は絵を描くという表現をしていますが、1、2、3年次に学んだデザインなどさまざまな授業から得たものは大きく、多くのもを受け入れたことはとても良かったと感じています。

また、いろいろな授業を取り、表現方法を知ってきたからこそ、改めて絵と向き合っているのだと思います。

大学で出会えたどの先生方も、熱く親身になって作品の相談に乗ってくれました。自分一人だけでは知ることのできなかった作家、作品、技法を知ることができ、それは先生方の授業がきっかけだったと強く思います。

また、3年次からお世話になった研究室の先生のおかげで、更に絵を描いていくことの喜びや、ポルトガルでのプロジェクトに参加させていただくなど、すばらしい経験をたくさんさせていただきました。

大学で出会った友人からも、制作をしていく中で刺激をたくさんもらい、創作力を身につけることができました。

また、家族の支えもあり、大学生活を送ることができました。多くの人に助けられながら今の自分が生み出されているのだと思います。

これからもさまざまな経験をして、新しい自分が生まれ、同時に吸収したことを作品としてどんどん自分の形で新しく生み出し、発信していきたいです。

## ■デザイン学科HP ■ 矢部 ひな美

いよいよ卒業だ。

しかし正直、この慌しいオレンジでの生活を、離れていく自分が想像できないでいる。私にとってオレンジは「行く」というより「帰る」場所なのだ。

この4年間で一番大きかったのは「出会い」だ。

本気で取り組んでいけるデザインとの出会い。

信頼し合える人々との出会い。

真剣に向き合ってくれる先生との出会い。

全てが私にとって、大きな、そして必要な出会いでした。

高校3年の5月、学校帰りにフラッと学校見学に来た。そして、HPの解放的な空間と、授業方針がとても気に入った。

意気揚々と入学したわたしに待っていたのは、理想と現実の差。自分の提案の甘さ、手先の不器用さにすぐに自己嫌悪に陥った。

しかしモノづくりがスキなので、力を伸ばすことしか考えていなかった。

よく努力家と言われるが、私には「努力」より「情熱」の方が合っている気がする。情熱が勝手に湧くことで、辛いと思ったことは無く、多くのことを身につけようと、貪欲な毎日を過ごしていた。課外活動にも多く参加した。そして、1年の最後の課題で1位をもらう。参加は、これが初めて。そこからは、常連になった。情熱が力となり、定着したのかな。

そして、本気な毎日の中で、本気の友人と出会う。

アイデアについて議論したり、カタチや素材、作り方を相談し合ったりした。

スケッチブックを持ち寄っての、深夜のガスト会がスキだ。

すぐにHPの人に鉢合わすのも面白い。

プレゼンし合うのは、欠点を見つけるのに役だった。

HPは約50人。とにかく一緒にいる時間が長かった。

個性が強く、個々が個々で仲がいい。そんな関係は貴重だろう。

そして、BBQ、花見、打ち上げ、合宿、鍋。遊びは癒しだった。

On、Offを共有できるからこそ、信頼でき、刺激し合え、とても愛しいのだ。

私にとってこの4年間は、人生で一番重みのある期間だった。

気付けば近くにあったものたちが、とても大切なかけがえのないもの。

忘れられない思い出を持って、今、卒業します。

ありがとう。



# 卒業にあたって

## ■メディアアート表現学科■ 小澤 太一

私たちが卒業する2011年3月、九州新幹線鹿児島ルートが全線開業を迎えます。着工は1989年。私たち2011年卒業生の多くが生まれた時期とほとんど変わりません。九州の方々にとってはどんなに待ち焦がれた2011年でしょうか。



私の実家がある山口では、この新幹線によって『鹿児島がグッと近くなる』とされています。もちろん実際の日本の地形は全く変わりませんが、所要時間の短縮によって、心で感じる距離は確かに近くなりそうです。

地形上のものとは全く別の「心でとらえる主観的な日本の形」は、交通や情報ネットワークの発展によって、日々凄まじいスピードで縮小の一途をたどっています。私がこの大学で過ごした4年の間にも、私の心を感じる日本はだいぶ小さくなった様に思います。しかしその分、心の彼方には新しい場所が見えてきました。まるで視界いっぱい無限に広がるテーブルにかかったテーブルクロスを手繰り寄せているかのようです。遠くのものが増えて来る一方で、近づきすぎてクロスのシワに隠れ、見えなくなってしまった場所も多くあります。

制作もそれに似ています。私はこの4年間で、周囲の人々に恵まれ、入学当初に遥か彼方に見えていた技術や表現を、また、見えさえしなかった考え方や知識を手に入れました。しかし、まだまだ「次の彼方」が待っています。22年をかけて、日本は九州縦断1時間20分という距離を手に入れました。私個人はこれからの人生、自らが選んだ制作という仕事で何の距離をどれだけ縮めることができるのでしょうか。精一杯楽しんでいきたいと思います。

## ■アニメーション学科■ アニメーションコース 袴田 圭吾

その作品との再会は1年生の講義の中でした。まだ幼稚園の時、ポンキッキーズの中でみた顔のある月にロケットがぶつかる映像。すごく心に残っていてずっと気になっていたけど、誰の何の映像なのか全くわかりませんでした。それが講義の中で全編みることができて、ジョルジュ・メリエスの『月世界旅行』だとわかった時はとても興奮したのを覚えています。他にも幼稚園の時以来にみた『かいじゅうたちのいる

ところ』のアニメーション、5歳のクリスマスに公民館でみた『注文の多い料理店』のアニメーションなど、ずっと忘れていたけど、心の片隅に残っていた作品に再会できたことがとても嬉しかったです。

僕にとってアニメーション学科での4年間は、それらの作品に出会った頃の自分に戻れたような日々でした。大学まで入って幼稚園の頃に戻ったように書くと誤解を生みそうですが、今まで忘れていた純粋にモノづくりを楽しみ、自分の知らない世界を発見していく日々を、十分に大人になってしまう前にもう一度味わえたことは僕の人生の財産です。

この素晴らしい日々を過ごす機会を与えてくれた両親に、家族に、本当に感謝しています。まだ何も恩返しはできませんが、いつか必ず親孝行したいと思います。そういえば、あの頃は嬉々として両親に自分の作ったものを見せていたのに、中学、高校と大きくなるにつれ自分の作ったものを両親に見せる機会は少なくなりました。とりあえず今は、今まで大学で制作した自分の作品を見せてあげたいです。



## ■アニメーション学科■ ゲームコース 野澤 邦仁

私は人を楽しませる事が好きで、コミュニケーションツールとしてのゲームに魅力と可能性を感じ、ゲーム学科(当時はアニメーション学科ゲームコース)に入った。

私が大学生活で特に着目し、学んだのは「人の心を知る」ことだ。人間の心がわかれば、それを活用して楽しさを生み出せると考えたからだ。

私は「人を知るためにはまず自分からだ」と考え、手始めに自分観察を行った。好きな事をし、本気で遊んだ。そして、「なぜ自分はこれが好きなのか。何を面白いと思ったのか。自分の行動原理はどこにあるのか。自分の価値観は何なのか…」と考えていった。自分のあらゆる心の動きを言語化し、理由をすべて自分自身に説明できるように訓練していった(と言っても趣味として日々楽しく行っているのだが)。



また、平行して自分以外の人間やモノに対する観察も行っていった。これは自分観察の応用だ。「なぜ人は遊ぶのか。なぜここであの人は面白かったのか。人は何を楽しいと感じるのか、このモノに込められた作り手の意図は何なのか…」などと観察し、考察し、分析し、仮説を立てていった。

そうして蓄えたものを元に、イベントを行ったり、作品づくりをした。どうやら蓄えたものは意味ある事だったようだ。著名ゲームクリエイターの方々と何度もイベントができ、制作に関わったゲームは日本ゲーム大賞を受賞した。卒業制作でつくったゲームは販売のお話をいただいている。

これらの根底には、日々考えてきた事が間違いなく活用されている。そして、それがのびのびできたのは私を取り巻く環境のおかげだ。大学の設備や先生、関係者の皆様、友達、チームメンバー、両親など、すべての人やものに感謝している。

私はこれまでに得たあらゆるものを糧とし、今後も自分ならではの道を進んでいこうと思う。

## ■芸術学部 マンガ学科 小林 賢一

煙草なんて吸わない、そう思っていた。

しかし、気づけば食後や談話の際に煙草を嗜むことは、しっかりと僕に根付いた習慣となっていた。そういった自分でも予想をしなかった小さな変化から大きな変化が、大学に入りいくつもあった。予想以上に、あった。

漫画を本気で描いている友人達と出会ったこと、大切な友人を浅はかな自己満足の優しさで傷つけなくしてしまったこと、雑誌で賞を取ったこと、大事な人に出会ったこと。

それらを含めた全ての事柄は、僕を形作ってくれたと、今、本気で思うのです。僕はマンガ学科に入って良かった。

そんな大学生活の集大成として、卒制に取り掛かりました。

製作中は学校に泊り込むことが多く、1日中作画室に籠もって友人達と漫画を描き、夜食を買いにサンダルでコンビニへ行き、一服のために淹れたインスタントコーヒーを持って友人と喫煙所へ向かい、寒い寒いと言いながら吐き出す煙草の煙と白い息は、僕にとって静かな青春でした。

あと少しで社会に出る。不安や焦りも多く、将来の展望もしっかり見えていないけれど、きっと大学での日々が、様々なことを乗り越える力をくれると思う。それが微力だとしてもきっと。僕はそう信じている。



## 細江英公氏の文化功労者顕彰を祝う会

昨秋、写真家として著名な細江英公氏が、写真界の発展に大きく貢献されたとの功績により、「文化功労者」顕彰の栄に浴され同氏の栄誉を祝し祝賀会を平成23年2月25日(金)、東京新宿京王プラザホテルの「エミネンスホール」で開催されました。尚、同氏は本学の名誉教授であり、同窓会副会長でもあります。



### 祝辞の各会の代表の方々

田沼武能氏  
東京工芸大学同窓会会長  
日本写真協会会長  
小野茂夫氏  
学校法人東京工芸大学理事長  
若尾真一郎氏  
学校法人東京工芸大学学長  
他に各会の代表の方々よりご祝辞を頂き、祝賀会も盛会のお開きとなりました。

広報 中村正彌 (34期)



## ■北海道支部

同窓会北海道支部では、昭和55年頃に函館在住の写真発達史研究者・佐藤清一さん（39期工業科）と北海道新聞記者・宇野均さん（34期技術科）お二人の尽力により、当時の東京工芸大学広報委員会の協力を得て、函館市内2ヵ所に大学名称入りの写真史案内板を設置し、現在でも北海道写真史の案内として函館を訪れる人達の目にふれていますのでご紹介します。

その一つは、下岡蓮杖の子弟・写真術創成期に東京で活躍した横山松三郎の墓所である函館市舟見町高龍寺の山門脇にあり、横山松三郎の偉業を紹介しています＝写真1。



写真1

もう一つは、函館市大町に現存する北海道最古の小林写真館（明治40年再建）前にあり、屋根の採光用スラントや写場の様子を紹介しています＝写真2。



写真2

案内板は今でも、函館を訪れる多くの観光客に写真の歴史を知るきっかけを提供していますが、時間の経過とともに案内板の傷みも生じています。

設置に携わったお二人とも若くして故人となり、当時の大学と支部とが取り交わした事情を知る手立てがありません。

写真の歴史が語り継がれる機会が少なくなってきた昨今、このような案内板の再整備を大学や同窓会が行うことについて、ご意見をお寄せいただければと考えているところです。

北海道支部長 筒淵 美允（37期）

## ■関西支部 双美会 「記念誌」の発行

双美会が活動を始めた昭和35年と申せば、池田内閣の所得倍増計画により、社会は活況に呈し日本の経済は著しい発展を遂げ、そして成熟期を経て今日に至っております。

その中であって写真界も技術革新で大きな変革・変貌を来しておりますが、奇しくも双美会は時代を共

に歩み歴史を刻んでいようかと存じます。

冊子は“写真で綴る50年の歩みと寄稿文”で纏めております。

本誌発刊に携わって思いますに、私たちを取り巻く社会環境は、時代と共に変貌してきておりますが、“学び舎”が結ぶ卒業生の絆は微笑ましい限りで、敬服いたし感激の極みでした。この思いを述べさせて戴きご挨拶と致します。

末尾にあたり皆様方の益々のご健勝をお祈りします。

双美会世話役 福岡 武雄（30期）

## 例会報告

双美会の例会は、22年11月20日（土）に開催しました。当日は天候にも恵まれ、何よりも幸いでしたのは、奈良平城



大極殿に展示された「高御座（再現）」

遷都1300年祭が終了した直後で、人込みもなく楽々と「平城宮跡」の歴史巡りが出来たことです。

今回は奈良にお住まいの上田史郎先輩のご案内で、再建された大極殿をはじめ遺構の展示館、平城宮跡資料館などを巡りました。

上田さんの解説がすばら



双美会 平成 22 年 11 月 20 日  
「大極殿」を背に集合写真



双美会 親睦会 平成 22 年 11 月 20 日  
奈良「江戸川」にて懇親会

しく、何時の間にか奈良時代にタイム・スリップして、往時を思い浮かべながら先人の人間模様や巧みの技に感激の一時でした。

午後の懇親会は、恒例の「江戸川」にて“会席膳”でいろいろな話題を俎上に交流を深めました。

12 名が集めた奈良会場の一日は、またの再会を楽しみに3時半過ぎ「江戸川」を後に散会しました。



## 23 期会

私たち 写真工専23 期は、昭和23 年の卒業時には62 名でした。現在は物故者と行方不明者を除くと31 名で、ちょうど半分になりました。クラス会など、全体の活動は数年前に終わりにになりました。

しかし、その後も首都圏在住者を中心に、有志の会合は時々開催しております。

今回も、平成23 年1 月14 日に、千代田区麴町の「エル」という店で集まりました。健康上の都合などで参加できなかったメンバーもありましたが、8 名が集い、楽しいひと時を過ごしました。(昨年夏には10 名が参集しました)

今回参加した人たちの平均年齢は80 歳+α です。トシを感じさせない元気さで、大いに盛り上がりました。

記 梅野 正敏 (23 期)



向かって左から、秋山 茂・斎藤 實・高橋 清・坂本 清士・保積 善三郎・森 祐一・梅野 正敏・小川 信一。



撮影：奥平由男

感動と心にくる永(映)像  
三人展

中村正弥  
奥平由男  
高尾正勝



撮影：中村正弥

2011年  
3月25日(金)~3月31日(木)

平日9:00~19:00  
土日祝10:00~18:00  
最終日15:00まで

スポットフォトサロン  
〒104-0061  
東京都中央区銀座1-3先 インズ3となり

SPOT PHOTO SALON

感動と心にくる永(映)像 三人展  
中村正弥 奥平由男 高尾正勝  
2011 年 3 月 25 日 (金) ~ 3 月 31 日 (木)  
平日 9:00 ~ 19:00 土・日 10:00 ~ 18:00  
最終日 15:00 まで  
スポットフォトサロン  
東京都中央区銀座 1-3 先 インズ3 となり  
中村 正彌 (34 期)

# 新3号館オープン間近!



中野キャンパスの第2キャンパスに建つ建物の名称は3号館と決まった。3号館は2010年9月中旬より鉄骨の組み立てが始まり、11月には5階までの骨組みが完成し、部屋の建設が行われてきたが、2011年2月中旬には、早くもほぼ完成の姿を見せ始めた。2月25日には竣工式が行われ、3月中旬には旧1号館に展開しているデザイン学科VCコースの引越が行われ、4月から授業を開始する運びとなった。建物は、本学としては初めてのガラス張りの斬新なデザインが施された明るい設計となっている。2011年度はデザイン学科のVCコースのみが使用し、2012年度にはHPコース、DCコースとマンガ学科の3年生のみ、2013年度にはデザイン学科、マンガ学科の3・4年生の全員が入ることになっている。

記と写真 福村 敏 (45期)

\*撮影:2011年2月16日

## 訃報 (敬称略)

早川 潔 (18期・写真理学科卒)

久山 富美雄 (33期・写真工学科卒)

## 編集後記

140文字で表現する手軽さが受けて利用者が増えている「ツイッター」。つぶやきの発信はもちろん、興味のある人をフォローできるシステムを利用し、個人で楽しむばかりでなく企業情報を他人に伝えたり、逆に興味を持っている顧客層が探してくれるという理由から企業ユーザーも急増しているようです。

昨年より、3月に発行する「ひろば」は、卒業制作展の特集号で、フルカラーの印刷になりました。今後とも、充実した会報にしていきますので、皆様からの投稿をお待ちしております。

広報委員 糸賀 成永 (56期)